

## 【研究会報告】

# ケベック学会西日本地区第1回研究会報告 La 1<sup>ère</sup> réunion d'études de la région ouest de l'AJEQ

2016年2月13日に阪南大学あべのハルカスキャンパスにおいて、ベルギー研究会との共催により「多言語社会ケベックとベルギー：その言語状況と舞台芸術」というテーマのもと、ケベック学会西日本地区第一回研究会が開催された。ケベック学会ではすでに2013年度の全国大会を関西学院大学で開催しているが、今回の研究会は今後の西日本地区及び地方での定期的な開催を見据えての第一歩であった。研究会は、丹羽卓企画委員長のもと、ベルギー研究会代表の岩本和子氏、ケベック学会の大石太郎氏、そして真田（筆者）が実行委員として企画、立案にあたり、運営は実行委員長である真田を中心に各方面の協力を得て行われた。今回の研究会は、2013年に関学の全国大会で行われたベルギー研究会との共催によるワークショップでの比較研究の成果を踏まえ、それをさらに発展させようとするものであった。

第1部「ケベックとベルギーの言語状況」では、ケベック学会会員の大石太郎氏（関西学院大学）の「ケベックのアングロフォン—現状と今後の展望」、ベルギー研究会会員の石部尚登氏（日本大学）による「ベルギーの言語としてのフランス語—ワロン運動における言語観から」の2つの発表が行われた。大石会員の発表は、ケベックにおいて長く支配者階級であり従来マイノリティ意識もなく研究の対象にもされてこなかったアングロフォンが、1974年以降フランス語一言語政策が推進されてきたケベックで徐々に研究の対象となり近年ではカナダの公用語マイノリティとしてとらえられるようになった状況に注目し、その現状と今後の展望を検証しようというものであった。大石氏は、カナダ国勢調査に基づくアングロフォン人口のマルチスケール分析とモンレアル島を中心とする現地調査の結果を織り交ぜた豊富な資料をもとに検証し、ケベック州におけるアングロフォンの状況を詳らかにした。大石氏の報告においてとりわけ印象的であったのは、アングロフォンが最も集中するモンレアルにおいて、フランス語憲章が定着した1990年代以降、英語とフランス語を話す高い二言語能力を持つアングロフォンが増加し、

2000年代以降は若い世代を中心にフランコフォンのアングロフォンに対する敵対心はうすれ「言語戦争」は沈静化していく傾向がみられるとの指摘であった。またモンレアルの英語系の子弟が通う英語を教授言語とする学校においても、必ずしも英語一色というわけではなく一部の授業でフランス語が取り入れられているとのことであった。こうした分析から、多言語化が進むケベック社会において、フランコフォンとアングロフォンという二分法は今後も果たして有効か、また二言語話者というアイデンティティは存在しうるかなど、今後の動向を考える上で極めて興味深い問題提起がなされた。

一方、石部氏の発表は、1830年に独立したベルギーの国家統合のシンボルとして、ワロン人とフランデレン人双方の選良民を中心に支持され公用語となったベルギーのフランス語と、方言でありながら内発的言語であり伝統語としてのワロン語との関係を、ワロン運動における言語観から明らかにしようとするものであった。石部氏は、19世紀中葉に設立されたりエージュ・ワロン語文学協会を中心に進められたワロン運動において表明された様々な言語観を紹介し、スタンスに違いはあってもそこに共通してみられるのは、ワロン語とフランス語はあくまで別の言語であるという認識と固有言語としてのワロン語への愛着であり、それを称揚しながらも文明言語としてのフランス語と折り合いをつけ公用語として堅持しようとする姿勢にあることを浮き彫りにした。また石部氏の発表から、ベルギーにおけるワロン運動とは、民族運動によく見られる抑圧された人々の解放運動ではなく、むしろ支配階級から発したもので対立言語であるフランデレン運動への対抗の意味合いが強く、ワロンとフランデレンの対立のはざまに、フランス語がベルギーの公用語としてしたたかに使い分けられ維持されているという言語の多層的な状況が明らかになった。

関学でのワークショップでも指摘されたように、ともに多言語社会として括られるケベックとベルギーではあるが、実際にはその状況は大きく違っている。第一部の大石、石部両氏の発表は、いずれも表面からは見えにくいそれぞれの多言語社会の実相に深く分け入った興味深い内容であった。

第2部「ケベックとベルギーの舞台芸術」では、第1部で検証したように複雑な言語状況を呈するケベックとベルギーにおいて、それぞれに独自の舞台芸術が花開き今日世界的に評価の高いパフォーマンス・アーツが出現していることに注目し、ベルギー研究会会員の高橋信良氏（千葉大学）の「ベルギーの現代舞台芸術－教育と情報が果たす役割」、ならびに藤井慎太郎氏（早

稲田大学)の「ケベックの地域主義・文化政策・舞台芸術」についての発表が行われた。

高橋氏は、ベルギー舞台芸術がフランスからの影響を脱して独自性を獲得しダンスを中心にヨーロッパにおける発信拠点の1つになった背景に注目する。とりわけ第二次世界大戦後、ベルギーの舞台芸術が国外への発信力を次第に高め、「若き演劇 *Jeune Théâtre*」と称される数多くの若いカンパニーや1980年代に世界を席卷した「フレミッシュ・ウェイヴ *Flemish wave*」の出現など次々と新興勢力が台頭することが出来たのは、政府の援助があったからだけでなく、将来の舞台製作者たちを育てる教育制度の拡充や情報網の整備があったからではないかと推測する。そしていわゆるオランダ語圏とフランス語圏のそれぞれの主要な教育機関の創設と発展について詳しく解説を行った。すなわちフランドレン語共同体では、世界的に知られた演出家のモリス・ベジャールによって創設された *Mudra* やパフォーミング・アーツ研究養成スタジオ *PARTS* があり、ワロニーとブリュッセルを含むフランス語共同体では、芸術創造のための教育機関として視聴覚芸術院 (*IAD*) や国立舞台芸術高等学院 (*INSAS*) が挙げられる。またそれぞれの共同体での情報集約機関としては、フランドレン演劇研究所 (*VTI*) と舞台芸術会館 (*La Bellone*) が代表的なものである。発表後の質疑応答において、ベルギーは市場が限られていることから歴史的に早い段階から外部とのつながりを意識した国際性に目覚め、複雑な言語事情を背景に非言語芸術が発展したこと、文化政策や教育においてもフランドレンとワロンの共同体レベルの競争原理が働き、互いに刺激し合い高めあうことになった点などが指摘された。

一方、藤井氏の発表は、ロベール・ルパージュ、ラララ・ヒューマン・ステップス、シルク・ド・ソレイユなどの成功に見られるように、世界的にも独創性の高さが際立ち注目をあびているケベックの現代舞台芸術に関して、詳細な年表や資料の裏付けのもとにその背景にある地域主義の高揚、文化政策の整備、舞台芸術における創造性の3項の相関関係を検証しようとするものであった。ケベックは1970年代にフランス、カナダ英語圏そして隣国アメリカとも距離をおき、自らのアイデンティティを模索しようと実験演劇に向かった。それと並行し1961年に創設された州政府文化省や1994年に創設されたケベック州芸術人文評議会によって北米では例外的に手厚い芸術創造支援が行われた。藤井氏はケベックでの市場の小ささが国際的な活躍に結びつき、ケベックで独自の文化政策が進展し行政と文化人との強いパートナーシップ

が生まれた背景には、言語対立を背景にしたケベックのナショナリズムや分離独立運動の高まりをへて「静かな革命」に至る歴史的経緯が大きく影響していることを指摘した。なおケベック演劇界の課題として、世代間の対立や政治的スタンスの変化による助成金の削減、持続可能な芸術家の雇用環境を求める動きなどがあることも明らかになった。発表では、現代ケベック演劇に関するユニークな映像資料も紹介された。

高橋、藤井氏両氏の発表から、複雑な言語事情と限定的な市場を背景に非言語芸術が発展し積極的に海外に活路を見出してきたケベック、ベルギー双方の舞台芸術に共通する状況と、それぞれの地域に固有の歴史的、政治的状況を背景に、行政からの支援を取り付けられたかに発展していこうとする独自の方向性が明らかになった。

今回の研究会では発表者4名のうち石部、高橋、藤井氏の3名ははるばる東京から参加して研究会を大いに盛り上げて下さった。また初めての地方開催で参加者を確保するために、ベルギー研究会をはじめカナダ学会（関西支部会）、フランス語圏研究会など幅広く案内を出したがその甲斐もあり、当日は学年末の忙しい時期であるにもかかわらず、関西だけでなく、東京、広島などから当日参加者も含め23名の出席者があった。ケベック学会の小倉会長も東京から駆けつけて参加して下さった。質疑応答では、地理、歴史、芸術文化にわたる横断領域的な視点から刺激的で活発な議論が繰り広げられ、ケベックとベルギー両地域についての新しい知見を得るとともに新たな疑問点も湧き上がり、研究会は4時間半近くにわたったにもかかわらず、まだまだ討論の時間が足りないと感じられるくらいであった。

この研究会を通して、多言語や多元性の問題を孕むケベックはグローバル化の今日、示唆に富む地域であり、ベルギーとの比較研究のみならず幅広い枠組みにおいて研究されることで、その問題性がさらに先鋭に問い直されることが明らかになった。カナダの一州であるケベックの研究を日本の地方から発信し考察する意義も大きいと実感された。当日はあいにくの曇り空であったが、日本一高いビル内のあべのハルカスキャンパスからは清々しい大阪の風景も垣間見られ、会場内の熱気とともに今後のケベック、ベルギー研究の新たな展開を示唆するような晴れやかな気分に含まれた研究会となった。

(真田桂子 阪南大学)